

合唱講義の取り組みを通して見えたもの

—ブルックナー没後 120 年記念「テ・デウム」の演奏発表を例として—

第 1 部 (全 2 部)

齊 藤 祐¹

(2016 年 10 月 25 日 受理)

Study of cause and effect on a first performance of [Te Deum] by Bruckner in Kagoshima

Part 1.

SAITOU Hiroshi

要約

「合唱 A・B」は、鹿児島大学教育学部音楽専修の前後期開講の専門教科科目である。組織改革の影響を受けると、受講者の男女比の不均衡が原因で、バランスのとれた混声合唱作品を教材とすることは困難であった。しかし、2003 年に全学対象の共通教育が開始されると、「合唱 A・B」に「解放科目」の「合唱 I・II」として学生を受け入れることで、相応規模の合唱演奏が可能となった。同時に、音楽科学生が合唱役員として積極的に講義運営に参加することや、共通教育や公開講座受講生を指導するなど、学生の授業への能動的参加や活動への試みを促すことで、学び合う学生の姿やリーダー養成への成果も現れてきた。

上記を背景に、2015 年後期「合唱」は音楽科学生、共通教育受講生、公開講座受講生—異なる音楽経験を持つ受講生—から構成されるという条件の中、鹿児島大学学生会管弦楽団と連携を図りながら、宗教合唱曲「テ・デウム」を 2016 年 7 月に鹿児島市において合同で演奏することを目標に講義を行った。

キーワード：鹿児島大学、教育学部、合唱、ブルックナー、テ・デウム

1 鹿児島大学教育学部・教育学研究科 声楽 教授

1. はじめに

筆者が講義を担当している教育学部前・後期講義「合唱 A、B」と共通教育前・後期講義「合唱 I、II」は、2016 年がブルックナー没後 120 年であることから、2015 年 10 月開講（後期）から 2016 年 7 月終了（前期）の 2 期に渡って、ヨーゼフ・アントン・ブルックナー（Josef Anton Bruckner, 1824-1896）作曲の宗教合唱曲「テ・デウム（Te Deum）」を教材に講義を行った。演奏発表は、2016 年 7 月 9 日、鹿児島県文化センター「宝山ホール」において鹿児島大学学友会管弦楽団の第 95 回記念定期演奏会で教育学部講義「合唱」との合同で開催した。本演奏会は、筆者が鹿児島大学学友会管弦楽団の顧問であることから、筆者自ら合同演奏会を発案し実現に至った。当日のプログラムにおいて、管弦楽曲は全 3 曲演奏された。鹿児島県における初回演奏であった「テ・デウム」は、メイン演奏曲として最後に演奏された。105 名の合唱と 4 名のソリスト、オルガンを含む 120 名のオーケストラの総勢約 230 名によって、ほぼ満場の聴衆による盛大な拍手とともに終演した。指揮は大河内雅彦（上野学園大学音楽学部指揮科非常勤講師）、合唱指揮は齊藤祐（鹿児島大学教育学部教授）であった。

本論は、第 1 部において 2015 年後期（10 月～2 月）の合唱講義の受講生の実態について、講義中の意見や後期終了後のレポート等を基に分析し、成果と課題について考察する。第 2 部において、2016 年前期（4 月～7 月）の講義と、同時に開講した一般社会人が加わる特別活動、いわゆる「土曜合唱」を含め、演奏終了後に提出されたレポート等を基に分析し考察する。特に、第 2 部においては別表に時系列で活動内容を示し、本番演奏までに取り組んだ活動とその展開状況を明らかにすることで、本プロジェクトの特色と成果や、今後の課題について検討し考察するものである。

2. 鹿大教育学部音楽科の合唱講義

鹿児島大学教育学部音楽科では 1993 年 5 月より、齊藤祐が「合唱」講義を担当した。当時、男女比が偏りがちな音楽専修において、全学からの学生を積極的に受け入れることで相応規模の混声合唱を可能にする努力を続けてきた。さらに、2003 年より学部専門教育科目を「開放科目」として開講することで共通教育受講生を受け入れ男女比を改善することや、演奏会の開催を目標にすることで、世界の名曲と呼ばれる作品を教材として講義を続けてきた。その後、公開講座が開講されると一般社会人が受講するようになり、每期平均 90 余名の受講生で講義を行って来た。（木下²⁾

シラバスにおいて、専門教育科目としての合唱は「発声法、歌唱法、発音法についての基礎知

2 宇都宮大学教育学部・教育学研究科 作曲 准教授

識」、「合唱指導方法の理解」、「編成、構成、環境、規模、雰囲気、等の合唱団の成立と運営要素の理解」などを目標とする一方、共通教育科目としては「コミュニケーション能力と相互理解」、「心身の健康」、「社会の一員として自発的表現を模索しながら参加する意義を学ぶ」等を目指している。

講義は毎週木曜日の5時限(16:10開始)に音楽美術棟4階大演奏室で開講されるが、合唱役員と呼ばれる学生は、昼休みを利用して12:15から15分間程度、事前打ち合わせのため齋藤研究室に集合する。内容は、まず、1. 前回の講義の反省、2. 本日の進行の確認、3. ストレッチと発声練習の担当者の確認、4. パート練習の要点と部屋の確認、5. 連絡事項について、である。出席者は、齋藤、インスペクター、サブ・インスペクター、パートリーダー(4人)、ピアニスト(2人)である。

以下の表1. に記した講義例は、2016年1月21日(木)のものである。すでに2015年12月27日にソリストのオーディションは終了しており、3名の独唱者(Sop. Ten. Bass)が決定している状況の中、最初の合唱との合わせの講義である。

表1.

経過時間	内容	登壇・指導
0'	ストレッチ・準備体操	音楽専修学生(3年生)
10'	発声練習	音楽専修学生(3年生)
15'	<Salvum fac> ・レクチャー(演奏上の注意、歌詞内容、ラテン語発音) ・各パート別講評、事項注意	齋藤
50'	・パート別練習(4部屋に分かれる)	音楽専修学生(各パートリーダー)、齋藤(巡回指導)
65'	・独唱者、ピアニストの紹介	齋藤
70'	・通奏練習	齋藤
88'	・事務連絡 ・今後の練習予定→終了	音楽専修学生(インスペクター)

本講義の特徴は、準備体操、発声練習、パート別練習、運営(インスペクター業務)を、この授業を専門教育科目として履修する学生、すなわち音楽専修の学生に担当させている点である(また、通常の独唱、伴奏ピアノも音楽専修学生が交代で担当)。ここで学生は、単に声楽の一形態としての合唱実技を体験・習得するだけでなく、教育者になった際の指導法や運営法を学習することができる。実際、役割を分担された学生たちの仕事ぶりは実にスムーズで、他の学生も含め、この授業の方法とその意味・意義がとてもよく理解され、実践されていた。(木下³⁾)

これまでの講義で取り上げて学内外で発表した作品は、交響曲第9番「喜びの歌」(ドイツ語)、ブルックナー「テ・デウム」(ラテン語)、マーラー交響曲第2番「復活」(ドイツ語)、フォーレ「レクイエム」(ラテン語)、モーツァルト「レクイエム・抜粋」(ラテン語)、ヘンデル「メサイア・抜粋」(英語)、ブラームス「ドイツ・レクイエム・抜粋」(ドイツ語)、ハイドン「天地創造・抜粋」(ドイツ語)、バーバー「レクイエム」(ラテン語)、吉岡「10匹のネズミ・抜粋」(日本語)、「ヴェルディ&ヴァーグナーオペラ合唱」(ドイツ語・イタリア語)他である。

これらの演奏は、音楽専修学生による2台のピアノや小編成の管弦打楽器アンサンブル、鹿児島大学学友会管弦楽団、MBCユースオーケストラ(鹿児島市南日本放送所屬)等の伴奏により行われた。演奏会場は、学内においては教育学部音楽美術棟4階大演奏室、同学部101号講義室、学生食堂「エデュカ」、学外では鹿児島県文化センター「宝山ホール」、かごしま県民ホール、鹿児島市民文化ホール第1であった。筆者は2010年から鹿児島大学学友会管弦楽団顧問として任に就いているが、当楽団の第95回記念定期演奏会と合同演奏することで、合唱受講者はオーケストラとの演奏体験が可能になることで、できる限り作曲者の望む演奏形態で発表できるように構想し、実現することを努力した。

3. 2015年後期の提出レポートから読み取れたこと

2015年後期受講学生のレポートによる記述や、学生達から実際に聴取した意見などを要約して以下に記す。

- ・役員は、木曜日の昼休み12:15に齊藤研究室に集合し、齊藤が司会をして5限の打ち合わせを行っているが、講義の進行や役割分担を決めることで自分たちも安心して取り組める。

- ・学生にインスペクターやパートリーダー等の役員を任せると、先輩達からの指導や情報を参考にアイデアを出すなど、お互いに協力することで講義運営への気持ちが高まる。

- ・毎回の講義において、3年生の学生が柔軟体操や発声訓練の指導を行うが、当然、学生によっては出来不出来はある。回を重ねるたびに指導の工夫が見られ、前に立って指導することを楽しみにする学生も増える傾向にあった。

- ・「テ・デウム」は、メロディーやラテン語歌詞などが一般的に知られていない、音楽科受講生にとっても音程の高低やリズム、作曲者の指定する作品本来の速度等、歌詞の発音など演奏技術的に困難さがつきまとう。後期開始時は演奏が困難であるとの意見も聞こえた。しかし、後期の後半になると、気持ちに変化が見られ、積極的に参加する学生が増えた。

- ・2016年1月に入ると、音楽科の学生が、共通教育学生や公開講座受講生の間に座り、楽譜の読み方や演奏方法をレクチャーする姿が、見られるようになった。

- ・インターネットや新聞記事によってソリストの募集を行い、実際にオーディションを経験した。本格的な歌声を聴いてより一層本番への意欲が高まった。

- ・発表日時と場所を決めて講義を始めることは、受講生のモチベーションを高めることに繋げ

るのでできる限り早めに決定し、その情報を周知すること。

・「テ・デウム」をオーケストラとともに演奏できたことは、一生の思い出になるとの意見を書いた学生が多く見られた。

・音楽科の学生にとって、自分が歌えないと（内容を理解して、実際に演奏できないと）自信を持って教えることはできない。合唱講義に臨む際は予習をするようになった。

・外国人留学生のレポートには以下の記述があった。ラテン語の発音は日本人にはむずかしいのでは？また、本番がないのに練習することは不思議だ。本国では本番の予定がない場合、学生はまじめに講義をうけない。（彼は2015年後期に受講した。毎時の講義の中で2016年7月に演奏会を予定している等を伝えていたのだが、理解していなかった。）

・公開講座受講生からは以下の意見が出された。音楽科学生が、高齢な自分たちにも一人ひとりに丁寧な指導をしてくれた。後期の後半になると彼らの指導の研究が進んだためか、学生の指導方法が上達して自分たちの演奏する気持ちが高まってきた。

4. 成果と課題

2015年後期レポートの記述の中に、教材が難しいとの声がある。さらに教科書に載っている合唱曲や現場で扱う簡単な合唱曲を取り上げてほしいとの声もきこえる。

音楽科在籍の学生の希望するそれらの作品を吟味してみると、現代日本の作曲家達は工夫を重ね努力しているとは言え、殆どが口当たりの良い小規模な合唱作品である。それらの題材は、生徒達が自分達の日々の生活における身近に起きた事柄や悩みなど共感し易いものであり、メロディーは声域にも気を配りながら、ポップス調のリズムと和音をちりばめた楽しい作品といえる。学生達は、これまでの学校教育でこれらの教科書にある「楽しい」作品を演奏した記憶を糧にすることで、自分達が理解でき、共感できる合唱作品とは、前述の教科書にある小規模の作品なのだ実感した。その結果の意見であるといえる。

現状の教育機関が抱えている授業時間の減少や、クラスで生じる生徒指導の問題等による教育環境から生じる指導上の難しさや問題等が山積していることは想像できる。また、集団での表現を求められる合唱を、クラス授業の中や学校全体で充実させることの難しさも理解している。生徒達が世界の名作と呼ばれる合唱作品に触れることは、至難の業なのである。そのような背景から、大学入学前までに学外活動やクラブ活動を経験した学生以外のほとんどの学生に、名作と呼ばれる作品を鑑賞したことはあるが、実際に時間をかけて演奏発表まで行ったという経験は、非常に少ないことがわかった。

本講義が教材として扱ってきた作品は、30人～100人規模の混声・同声の四声体～八声体の合唱であり、共演はオーケストラや小編成のアンサンブル、ピアノ1台～2台である。楽器での

共演を担当するのは、音楽科在籍の学生や鹿児島大学学友会オーケストラであり、学外のオーケストラでもある。また、これら作品の主たる表現のテーマは、「神への賛歌」や「人間の愛」についてである。日本の音楽教育発祥の基礎・規範となる作品が多く含まれ、その形式や様式、演奏形態等の音楽理論や音楽史の観点から、作品を研究することは大変有意義である。また、演奏会を目標に講義を進めることは、学生のモチベーションを高めるためには必要である。そして、より上質な演奏を求める気持ちは、毎回の講義を充実させる工夫から、合唱団の構成や組織の在り方、運営方法を研究する必要性も生ずる。

教育学部音楽科に在籍して、再び教科書に掲載されている作品を知っても学生達の今後の演奏経験や音楽教科の研究を深めることには繋がらない。筆者が「演奏することが難しい」、「難解である。」と呼ばれる世界の名作を教材として提供することで、学生はその作品の持つ名作たる所以を知ることになる。また、その作品に向き合い、その難解さに悩むことで自分の力量不足に気付く。その結果、学生は演奏技術の向上を目指しながら、同時に作品を研究する意欲を醸成させると考える。

一方、学生の指導力を磨くために、合唱指導法の開発が必要である。そのためには発声の技術や指揮法等、実技と呼ばれる技術について、意識が高くより一層の訓練と訓練することを理解する学生が増えるべく、学生の質を高める環境を構築する必要がある。

1. 参考文献

久保田慶一、木下大輔「中学校音楽科教員養成のためのカリキュラムモデル構築に関する研究」『日本教育大学協会研究年報』第27集 (2009年) pp.269-297

2. 音源資料

Von Karajan, Herbert. (1978, Msikverein, Grossersaal, in Wien) DVD

Johum, Oigen. (1965, Jesus Kirche, in Berlin) CD

CD オイゲン・ヨッフム指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 バイエレン放送合唱団録音1965年6月7月

3. 使用楽譜

Bruckner, Anton. [Te Deum] Nach den Quellen herausgegeben von Christiane a Campo. Klavierauszug von Josef Schalk. Edition C.F. Peters